

昭和61年度の施設整備……	1
科学随想……	3
海外レポートシリーズ……	5
附属工業高校の研究開発事業……	6

昭和61年度の施設整備

施設部

施設整備事業は、予算規模の大小によって、一般に新営工事と営繕工事とに分類することが出来るが、ここでは、新しい教育研究活動の空間を与えることになる新営工事について記載する。また、61年度工事には60年度から継続して61年度にまたがるものも含まれるため、一般教養校舎の低層棟（61年7月完成）も該当することになるが、これは昨年のこの欄で紹介されているので割愛することとし、草津白根火山観測所、一般教養校舎（高層棟）及び国際交流会館の三施設について規模、建物の構成、設計の要点等を紹介することとする。

草津白根火山観測所

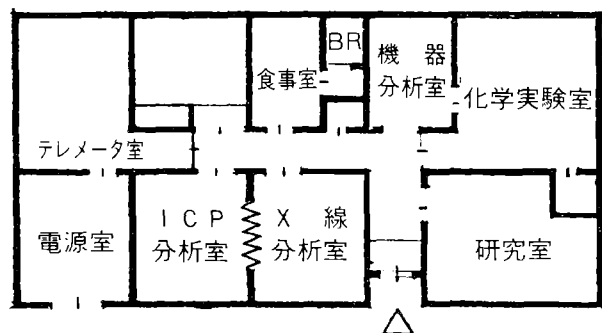
昭和59年度測地審議会の第三次噴火予知5か年計画で重点観測するものとして12火山が選定されたが、そのうちの一つである白根火山は、地球化学的観測手法で永年にわたる研究実績を持つ本学が観測を担当することが適当とされ、その現地拠点として本施設が建設されることとなったものである。建設位置は、群馬県吾妻郡草津町大字滝尻原にある国立療養所栗生楽泉園の敷地の一角であり、ここの1,400㎡を所管換えして用地とした。標高1,080mの山林である。高所寒冷地であるため、設計には凍害、積雪に対する配慮を施し、降雪前に完成させるべく工事の発注を急いだ。幸い工事も順調に進捗し11月中旬に竣工し、現在稼働中である。建物は、床下に資料収蔵スペースを持つ鉄筋コンクリート造平家建てで、面積は200㎡であり、テレメータ室、各種分析室及び研究室・実験室等で構成されている。この工事には、別予算による山頂附近の観測センサー設置、データ送信室取付け及びその送信ケーブル布設等の工事を伴っている。

一般教養校舎（高層棟）

前述したように、昨年完成した低層実験棟と一体となって機能するものであって、旧称第三新館が老



草津白根火山観測所



朽化、機能低下していることから、これに代る建物を高層化して建設し、現在数棟に分散している一般教育関係の諸室を集約化することとして、第三新館の一部を取り壊してその跡に建設するものである。用地が狭隘であるため建物の軸の取り方が設計上の関門であった。建物は鉄骨鉄筋コンクリート造10階建て延面積5,240㎡（低層実験棟の延面積は1,800㎡）であり、1～5階は講義室と学生実験室、6・7階教官実験室と学生実験室、8階語学実習室、9・10階教官研究室という概ねの構成である。四方に校舎等が近接しているため、工事の実施には難渋するが、62年末には竣工の予定である。

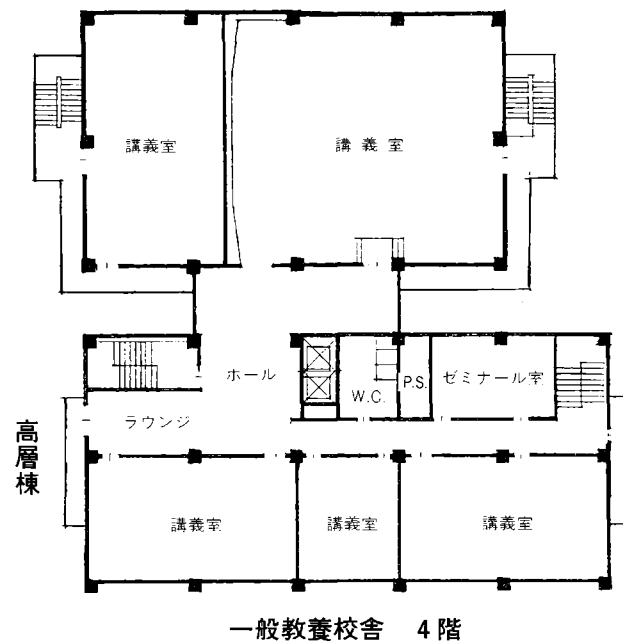
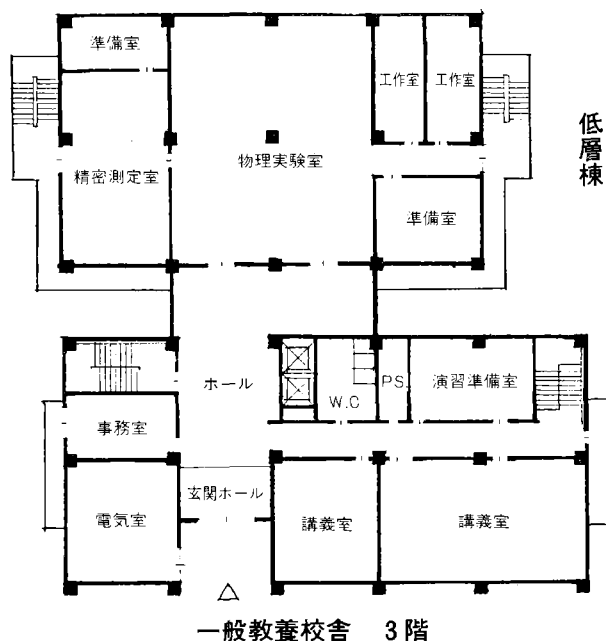
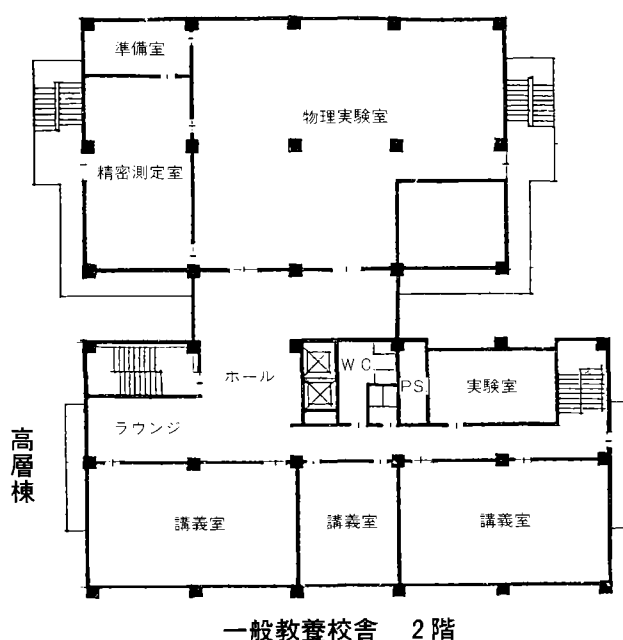
国際交流会館

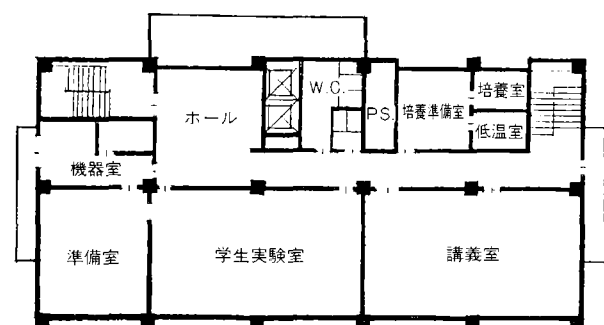
近年、国策としてもとりあげられ、本学でも積極的に推進している教育研究の国際交流・協力に対応するため、外国人研究者に居住の便を供し、会議室や図書室などを付設して、研究活動及び日常生活が円滑に行われることを目的として建設されるものである。既に本クロニクルNo.195で詳細に紹介しているので、ここでは概要のみを記す。

建設位置は大岡山キャンパス石川台地区の南端であり、三方が公道に接している約6,000㎡の部分である。建物は家族棟、单身棟及び共用棟の三棟から構成されており、それぞれ鉄筋コンクリート造3階建

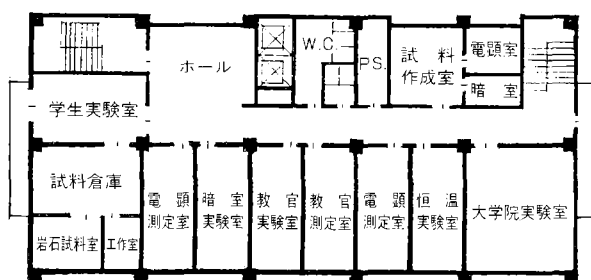
で延1,640㎡、同1,720㎡、同2階建て1,090㎡である。ここでの居住可能者数は、家族研究者27（夫婦15、家族12）、单身研究者73である。この設計では近隣の住宅地と如何にして調和させ、与えられた敷地条件を最大限に生かして良好な住環境を創るかが総てであった。

近隣住民との話し合いや、敷地深く埋設されていた予期しない障害物などで思わぬ日時を費やしたが、今後は工事も順調に進捗するものと考えられる。竣工は一般教養校舎と同じ62年末となり、その後調度品調達などの準備期間を置いて63年4月に開館の運びとなる予定である。

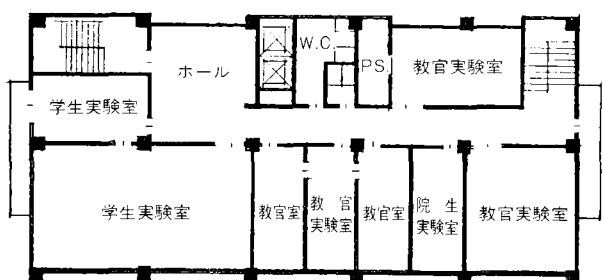




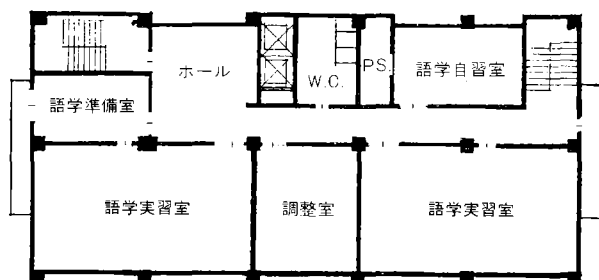
一般教養校舎 5階



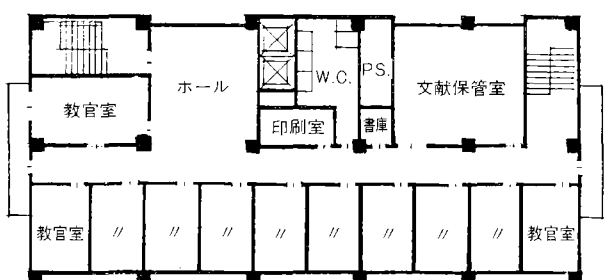
一般教養校舎 6階



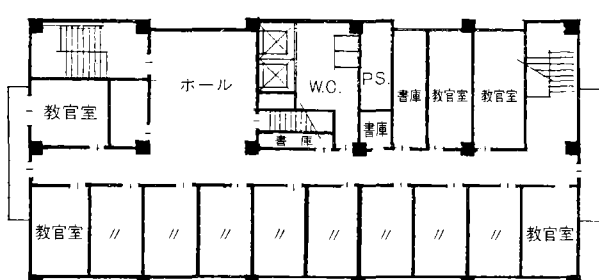
一般教養校舎 7階



一般教養校舎 8階



一般教養校舎 9階



一般教養校舎 10階

科学随想

アスパラギナーゼ——合成高分子ハイブリッド

——白血病，リンパ肉腫の新しい治療剤——

稲田 祐二

アスパラギナーゼは、白血病（血液のがん）やリンパ肉腫（リンパ節がん）の患者に対する治療薬である。この酵素は、アスパラギンをアスパラギン酸とアンモニアに加水分解する反応を触媒し、がん細胞にとって必須栄養源であるアスパラギンを、血中より除くことによって抗がん性を示す。しかし副作用も強く、長期の投与はアナフィラキシー・ショックをおこし、死に至る危険性がある。ここで述べるアスパラギナーゼ——合成高分子ハイブリッドは、

これらの副作用を消失させるのみならず、さらに制がん作用を増強させた新しいタイプの抗がん剤である。この研究は、過去15年間私達の教室で基礎研究を行い、現在大阪大学医学部を含む各地の病院と共同研究を行った結果得られた情報である。

アスパラギナーゼは、分子量約13.6万の酵素タンパク質であり、大腸菌より単離結晶化されたものが制がん剤として市販されている。先に述べたこの薬剤の副作用の原因は、この酵素が大腸菌由来のタン

パク質で、ヒトにとって異種の物質（非自己）と認識されるためである。その結果免疫系を刺激し種々のアレルギー反応をおこし、連続投与が困難になる。

一口で言うならば、アスパラギナーゼの抗原性が副作用の原因である。同様の問題は、タンパク質を血中に投与する薬剤の共通点であり、この解決は新しいタイプの薬剤の誕生を意味する。この抗原性を消失させることができれば、アレルギー反応をおこすことなく、頻回に亘って患者への投与が可能になる。

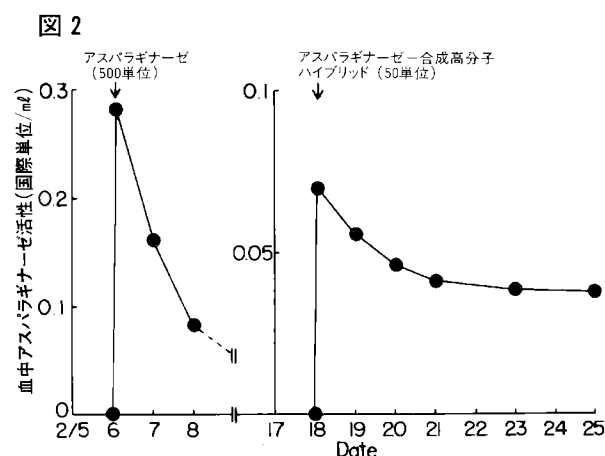
私達は、アスパラギナーゼの抗原性を消失させるために、モノメトキシポリエチレングリコール（分子量：5,000）をタンパク分子表面に存在するアミノ基と反応させ、ハイブリッドを合成したところ、このハイブリッドは従来のアスパラギナーゼと比べ、期待以上の抗がん作用を有することを発見した。少々専門的な話になるが、ハイブリッド化することによる性質の変換を列記すると、① 抗体との結合能の消失と抗原性の消失、② 体内停滞時間の延長（約20倍）、③ 抗がん作用の増強（13日で死亡するがんのマウスが、46日間で60%生存）、④ 投与量の減少等である。以上の優れた基礎的データより臨床への発展が期待される。そこで次に、自然発生のリンパ肉腫をもつ犬について、この薬剤の投与を行ったところ、劇的効果をあらわし、1日で腹水が消失し、5日で肉腫（4 cm × 4 cm）が完全に消失し、寛解状態になった。（図1、図2）

まず、この犬のリンパ肉腫が、アスパラギナーゼに対し感受性であるかを知るため、アスパラギナーゼを500単位、2月5日血中に投与する。血中アスパラギナーゼは投与と同時に増加するが、時間と共に減少する。血中アスパラギン量は、酵素投与により75 μM より0となり、腹水量も減少する。すなわちこの肉腫は、アスパラギナーゼに感受性であることがわかる。2月8日～17日まで放置すると肉腫は再び元の状態（3 cm × 4 cm）の大きさになり、腹水量も増加、アスパラギン量も73 μM となる。2月18日アスパラギナーゼ——合成高分子ハイブリッドを50単位（前回の1/10量）投与する。アスパラギナーゼは、血中で長時間停滞し、血中アスパラギンは消失する。そのため腹水は1日で消失、5日後の2月23日には肉腫も消失する。

現在多くの制がん剤が、白血病あるいはリンパ肉腫に使用され、それなりに効果をあらわしているが、いずれの制がん剤に対しても、薬効の認められなく



図1 リンパ肉腫の犬
あごの下の頸部がリンパ肉腫



月日	アスパラギナーゼ(500単位)				アスパラギナーゼ 合成高分子ハイブリッド (50単位)			
	Feb. 5	6	7	8	17	18	19	23
Asp		21	92			10	35	59
Asn		75	n.d.			73	n.d.	n.d.
Glu		158	336			82	181	203
Gln		796	1211			574	633	866
赤血球数/mm ³	RBC	283×10 ⁴				280×10 ⁴		345×10 ⁴
白血球数/mm ³	WBC	26×10 ³				20×10 ³		11×10 ³
腹水		+++		+	+++	-	-	-
リンパ肉腫の大きさ (cm × cm)		4×4		2×2	3×4		2×3	0×0

図2 犬のリンパ肉腫に対するアスパラギナーゼ——合成高分子ハイブリッドの効果

なった患者は死を待つのみである。そのような患者に対し、医師と家族の了解のもとに本薬剤を投与しているケースが10余にのぼり、いずれも寛解状態で生存している。

私はあと1年余で本学を退職することになっています。常日頃、私は研究を通じ、何か社会に役立つことをやり遂げたいと思っています。この研究成果

が、新しい制がん剤として厚生省で認可され、苦しむひとに希望を与えることができれば、この上ない幸と思います。

(理学部生命理学科 教授)

海外レポートシリーズ

第5回国際流動層会議に出席して — 国際学術交流基金 —

幡野 博之

1986年の5月18日から23日までデンマーク・エルシノアで開かれた第5回国際流動層会議に出席して来ました。小生にとっては外国旅行も国際会議での発表も初めての経験で、しかも、あの、チェルノブイリ事故やアメリカのリビア空爆の直後でしたので、出発前からかなり緊張した旅となりました。

会議の行われたエルシノアは、ハムレットの舞台として有名なクロンボー城のある町として知られています。コペンハーゲン中央駅からは、みかけは路面電車に似ていますが、中はグリーン車より広々として綺麗な郊外電車で約50分の所にあります。ここには、スウェーデンのヘルシンボリまで僅か20分で行ける定期船があり、船賃がコーヒー一杯分と安く、しかも、国際航路ですから免税品目当ての人も多く乗っているようです。また、バルト海の入り口となる重要な海峡に面しているため、たくさんの船が行き交っていました。このような交通の要所にありますが、砂浜や海はとてもきれいで、夏にはリゾート地として賑わいます。会場となったマリエンリスト・ホテルは、この町唯一の高級ホテルで、駅から15分程歩いた海岸にあります。私が泊まった部屋の正面からは、海峡越しにスウェーデンが、右手にはヨットハーバーやクロンボー城が望め、自分がお金と暇のたっぷりある王侯貴族になったかのように勘違いしそうでした。

かつてのクロンボー城は、デンマーク王室が城の目の前にある国際海峡を大砲で制圧し、通行する商船から通行税を取り立てるために使われ、その収益は莫大で、デンマークの国家財政を潤していたそう



会場よりクロンボー城を望む
(遠くの陸地はスウェーデン領)

です。現在では、ハムレットの舞台として観光客を集め、デンマークに収益をもたらしています。

さて、流動層は固体の粒子群を流体を使って流動化する装置のことを言いますが、粒子や流体の動きが複雑に関係し合い、気体を用いると気泡まで生成するため、基礎的な現象から実装置への応用まで実に幅広い研究が行われています。そのためか、この会議は3年に一度開かれますが、世界各国から集まった流動層研究者が、合宿形式で全員同じホテルに泊り、会場を一つだけ使って発表、討論を行うという特徴があります。今回は24か国から約200名の研究者が集まり、80件の研究発表が行われました。また、本会議以外にも分野別に6つのワークショップが持たれ、28件の発表がありました。こちらの方は会場も小さく特に興味のある人が集まるため、本会議以上に白熱した討論が行われていました。日本から9件の論文が提出されていましたが、いずれも大学からの発表でした。ただ、バジャー社の湯川さん（本学の出身で50才位です）のようにアメリカ人として参加された人もいました。

前回の賢島でもそうでしたが、アメリカ、イギリス、日本の3国から提出された論文は全体の50%を占め、流動層研究の上でも日本の役割は大きいといえます。また、これまで少なかった粒子挙動や高速流動層関連の研究が増え、流動層研究も新しい局面を迎えつつあるようです。

小生は、光学繊維プローブによるガス濃度の連続測定法を利用して、気固系流動層内の気泡周辺で求めた等ガス濃度分布線図について発表しました。気泡の分裂や合体に伴ってどのようなガス挙動が生じるかは、これまで実測例がなかったこともあって、かなり多くの人が、休憩時間などに個人的に感想を述べてくれました。ただ、この発表も日本で用意し

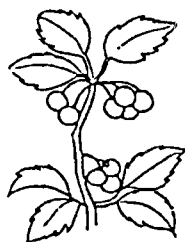
ていった内容と大分違うものになってしまいました。というのは、発表時間が15分くらいあるだろうと予想していたのが12分に縮められたり、操作技術上の問題から発表時のスライドが7枚に制限されたため、原稿を大幅に変更しなくてはいけなくなったからでした。また、当初は21日の夕食前の発表という予定でしたが、20日の午前に変更されてしまいました。しかも、これを登録が終わった18日の夜に知ったので、原稿を検討する時間がほとんどなく、発表当日は3時頃から起きて練習をした程でした。綱渡りをしているようで大変緊張しましたが、発表が無事に終わったので、この時の苦労も今では楽しい思い出になりました。

会議中、出席者の親睦を計るためクロンボー城ツアーやイ・ムジチ楽団のコンサート・ツアーが組まれました。また、22日には晩餐会が開かれました。それまで一緒に食事をしてきたせいもあり、小生の隣ではキエフとモスクワから来た人が、アメリカ人を間に挟んで原発事故のことも含めて歓談する風景も見られました。さらに、あちこちで次回カナダのバンフで開かれる会議でまた会おうという約束が交わされ、なごやかな雰囲気の中に最後の夜が過ぎていきました。

会議は翌23日の午前中で終わりましたが、その後、イギリスのロンドン大学のコリンズ先生を訪ね、気泡周辺からのガスのはく離と気泡の動きとの関係についての話し合いを持ち、5月30日に成田に戻って来ました。様々なトラブルを体験しましたが、大したことなく逆に良い経験を積むことが出来た出張でした。

最後に今回の出張に際しまして東京工業大学百周年記念事業の国際学術交流基金より旅費の補助を頂きました。心からお礼申し上げます。

(資源化学研究所 助手)



附属工業高校の研究開発事業

研究開発委員会

附属工業高校は昭和58年度から昭和61年度まで、4年間にわたって「高等学校の職業教育を主とする学科において、産業構造の変化や生徒の能力・適性・進路等の多様化に対応した職業教育の改善、及び充実を図る教育課程の研究開発」をテーマにして、文部省の研究開発学校として研究開発を行った。

この研究開発は、昭和57年度に藤本工学部長（本校校長事務取扱）の指導のもとに、研究開発委員会が設けられたときにスタートした。ここでは、本校の工業技術教育の基本的役割、目的として、① 生徒のもつ諸々の能力を多面的に発達させ、豊かな人間形式をはかる、② 実際の・職業的能力の基礎を与える、③ 物事を論理的に考え、合理的に処理する能力を身につけさせる、ことが確認され、さらにより具体的な教育目標が定められた。

こうした目的と目標のもとに、文部省の研究課題・研究委嘱事項を具体化した三つのねらいを定めた。それは、① 工業の各学科に対応した工業基礎課程の開発、② 各学科共通に履修させる工業科目「技術と文化」、「情報技術基礎」の開発、③ 課題研究の導入、である。

① 工業基礎課程の開発については、従来の技術教育を主体とし、その教育内容を精選集約した「工業技術系」のほかに、工業教育を主眼とし、工業科目との連携を考えながら、その基礎となる理数系科目に比重をおいた「工業基礎系」のコースを設定し、三年次において生徒の希望にもとづいて類型選択を行った。この類型選択で三年生は、一学級を二分した少人数教育のもとに、工業技術と理数科の実習・実験・演習の徹底した指導を受けることができ、生



研究発表会での生徒の課題研究発表

徒には好評であった。

② 新工業科目のうち、「技術と文化」は、技術を材料・エネルギー・情報・環境などの広い角度から考察させ、技術と文化のかかわりを認識して、常に幅の広い視野に立って技術を発達できるような知識と考え方を得させることを目的にし、新テキストを作成するとともに、工場等の見学を実施して、生徒の興味・関心を引き出すことに努めた。新テキストの主要テーマは、自動車・テレビ・製鉄・電気・プラスチック・都市であり、各学科の教官のほか普通教科の教官も参加して、一テーマ4時間の授業を行った。一年生の生徒は、視聴覚教材を豊富に取り入れた授業に満足し、テキストも好評であった。

新工業科目の「情報技術基礎」は、一年生を対象にパーソナル・コンピュータの基礎的指導を行うものである。「技術と文化」と同様に本校で編集・作成したテキストを用い、パソコン室で2人に1台のパソコンを使って授業が進められた。授業開始前後のアンケートの結果を見ると、70～80%の生徒がこの科目の授業に興味をもってくれたことがわかる。また、生徒のなかには、さらにパソコンの練習を積み、三年次の課題研究で見事にパソコンを使いこなしている者も現れた。少なくとも「コンピュータは難しいもので、自分にはわかりっこない」という先入観を打破できたことと思われる。

③ 課題研究の導入は、次の二つの教育的背景をもつ。第一は、技術の進歩に伴い、工業教科の学習内容がふえ、内容の精選のみでは不十分であり、授業方法の改善が強く求められてきたこと。第二は、最近の高校生が、教えられることに慣れ過ぎて、自ら「学びとる」という積極的な意欲と、自主的な問題解決の意欲に欠ける風潮があることである。そこで、三年生を対象に卒業制作や卒業研究にもあたる課題研究を2単位（前期のみで週4時間）設定した。

初年度には教師・生徒ともに多少のとまどいがあったが、二年生に公開授業を見せたり、運営指導委員の先生も参加する発表会などによって教師も生徒も大きな刺激を受け、しだいに立派な作品が作られるようになった。昭和61年11月7日の研究発表会で生徒自らが発表した作品（機械科；スターリングエンジンの製作、電気科；リニアモーターカーの製作、電子科；マイクロマウス、工業化学科；バイオリアクターによるエタノールの製造、建築科；ライトの住宅建築について）などは、全国から参加した150名余の教育関係者から高い評価を得ることができた。

最後になってしまったが、この4年間、研究開発事業のために御尽力下さった運営指導委員の先生方に心から感謝申し上げたい。

（附属工業高等学校研究開発委員会）

梅ヶ丘留学生会館における 第10回パネルディスカッション

香 川 利 春



毎年恒例となった留学生会館におけるパネル討論会が、昨年11月8日(土)午後6時から梅ヶ丘留学生会館において催された。当パネル討論会は、当時新設された梅ヶ丘留学生会館において昭和52年に第1回が行われて以来第10回目である。

今回のテーマは「Today's Youth, Here and Elsewhere：当世若者お国ぶり」であり、コーディネータは2人の留学生相談主事、森田矢次郎教授、荒井滋久講師である。討論会は柳沢 健教務部長の挨拶にひきつづき、M. Padomanaban氏（インド、有機材料工学専攻）を進行係りとして、まず以下の5人の留学生のパネリストの話から始められた。

つぎにパネリストの話を要約する。

1. Mr. V. S. Mambo（ザイール、化学専攻）ザイールの若者と日本の若者を比較し、責任感などについて意見を述べた。また自分の意見を述べる訓練を子供の頃から重視するザイールの教育を紹介した。
2. Mr. C. C. kong（シンガポール、情報科学科1年）来日当初は日本の若者のまじめさに驚いたが、時間の経過に従って、日本の若者もシンガポールの若者も何に興味が有るとか、将来に対する不安とかの点で、ほとんど同じであると感じられるようになった。ただ日本の若者（若者に限らないだろうが）

には、多種民族の共存に対する理解が足りないようだ。シンガポールの若者としては、多種民族を誇りに思っている。

3. Mr. E. Stuhlraeger (スイス, E. T. H. 機械工学科卒) スイスの教育制度について図表を用いて説明。スイスでは、日本の教育制度のようにただ一度の試験で振り分けることはしない。また教育コースも多様化かつ柔軟で、どの段階でも職業を選べるようになっている。スイスの若者は一般的に見て個人主義を尊重し、家族との連帯感が強いようである。日本の若者のようになんでもグループで行動したがる傾向はスイスの若者には余り無いようである。

4. Miss. M. Miki (アメリカ, UCLA卒 交換留学生)

日本生まれのアメリカ育ちの女性から見た日米若者の比較を行い、意見を述べた。日本の女性は過去に比べて変わってきていると言われるがまだまだ専業主婦の傾向が強い。アメリカでは仕事と家事を両立している女性が多いのに、日本の教育も新しい時代的女性に対してサポートするように変わるべきだ。

5. Mr. H. de Farranti (オーストラリア, 芸大修士) 昭和59年に日本のビザを習うために来日、宮廷音楽を専攻。音楽こそが世界の共通の言葉であるとし、音楽に関連し日本の教育に対して意見を述べた。

これらのスピーチに対して活発な意見交換がなされ、相互の理解のために、このような討論の場が極めて重要であることが再認識された。

コーヒブレイクに出された森田教授夫人手製のケーキのおいしかったこと、また当討論会を準備された多くのスタッフの方々に深く感謝する次第である。(工学部共通講座 講師)

金庭教養文庫 新着図書

故・金庭秀松氏(大正7年本学卒業)の奨学寄付金による「金庭教養文庫」は、昨年4月に開設以来、御好評をいただいておりますが、このほど今年度分が新たに追加されることになりました。

『ご冗談でしょう、ファインマンさん』をはじめ、様々な分野の教養図書516冊が、2月初旬ころから、1階休憩室脇の書架に並ぶ予定です。

貸出条件は、他の一般図書と同じです。

大いに御利用下さい。(附属図書館)

大岡山キャンパス各講義室の名称を変更

教 務 部

大岡山キャンパスの建物名称が変更されたことに伴い、慣れ親しまれてきた同キャンパスの講義室名称を昭和62年4月1日から変更することになりました。

講義室名称の構成は、次の例示のように、頭に講義室の所在地区を示すアルファベット1文字を含む4桁となっており、名称から所在場所が分かるよう配慮してあります。

W	5	2	1	講義室
建物名称 (数字は)	建物の 番号	設置 階数	整理 番号	

(注) H: 本 館
W: 大岡山西地区の建物
S: 大岡山南地区の建物
M: 緑が丘地区の建物

昭和62年度前学期の授業時間割表は、新しい講義室名称で表示しますが、講義室の出入口には新旧二つの名称を表示しておくとともに、授業時間割表にも新旧対照表を添付して、混乱を生じないように配慮します。

講義室名称新旧対照表

講義室名称		部屋番号	講義室名称		部屋番号
新	旧		新	旧	
本 館			H135	135	3階 75号
H101	101	地階 7号	H136	136	" 15号
H109	109	" 67号	H137	137	" 31号
H111	111	1階 23号	H141	141	屋上東側
H121	121	2階 26号	大岡山西2号館(新設建物)		
H122	122	" 95号	W241	—	4階
H131	131	3階 5号	W242	—	4階
H133	133	" 7号			

講義室名称		部屋番号	講義室名称		部屋番号
新	旧		新	旧	
大岡山西3A号館(旧第3新館)			大岡山南2号館(旧中棟3号館)		
WA31	335	3 階 315号	S221	527	2 階 204号
WA32	332	〃 314号	S222	526	〃 203号
WA33	333	〃 312号	S223	525	〃 202号
WA34	334	〃 311号	S224	524	〃 201号
WA41	341	4 階 415号	大岡山南3号館(旧中棟2号館)		
WA42	342	〃 414号	S321	523	2 階 215号
WA43	343	〃 413号	S322	522	〃 207号
WA44	344	〃 412号	S323	521	〃 206号
WA51	351	5 階 515号	大岡山南4号館(旧中棟1号館)		
WA52	352	〃 514号	S421	528	2 階 221号
WA53	353	〃 513号	S422	529	2 階 222号
WA54	354	〃 512号	S423	52A	〃 274号
大岡山西4号館(旧第4新館1号館)			S424	52B	〃 275号
W461	261	6 階 613号	大岡山南 5 号館(旧南棟)		
大岡山西5号館(旧第4新館2号館)			S511	412	1 階 151号
W521	222	2 階	S512	411	〃 101号
W531	232	3 階	S521	421	2 階 209号
W541	242	4 階	大岡山南 6 号館(旧東棟)		
大岡山西6号館(旧第4新館3号館)			S611	711	1 階 153号
W611	213	1 階	S621	721	2 階 255号
W621	223	2 階	大岡山南講義棟(旧三学科共通講義室)		
W631	233	3 階	S011	413	1 階
W641	243	4 階	緑が丘 1 号館		
大岡山南 1 号館(旧北棟)			M111	811	1 階 103号
S121	621	2 階 251号	M112	812	〃 105号
S122	622	〃 254号	M113	813	〃 106号
S123	623	〃 255号	M114	814	〃 107号
S124	624	〃 256号	緑が丘 3 号館		
S125	625	〃 261号	M311	912	1 階 104号
S126	626	〃 208号	M321	921	2 階 203号
S131	631	3 階 351号	緑が丘講義棟(旧緑が丘3号館別棟)		
S132	632	〃 301号	M011	911	1 階

(注)

- ① 本館は建物名称が変更されていないこともあって、現在の講義室番号の頭にHを付したのみである。
- ② 大岡山西3A号館(旧第3新館)の各講義室は、建物名称に合せて、WAで始まる講義室としてある。
- ③ 独立講義棟となっている大岡山南講義棟(旧三学科共通講義室)及び緑が丘講義棟(旧緑が丘3号館別棟)については、それぞれS011, M011講義室としてある。

授業開始時刻を変更

教 務 部

昭和62年度前学期から、学部・大学院とも授業開始時刻を9時からに変更して別表時間割により実施することになりました。

要点は次のとおりです。

1. 授業終了時刻を現行とほぼ同じの16時30分とし、このため、第1時限、第3時限、第5時限及び第7時限の各奇数時限後に設けられていたそれぞれ10分間の休憩時間をなくしました。
2. 講義時間は1時限授業の場合は45分で現行と同じですが、2時限授業の場合は90分となります。
3. 第3、第4時限及び第5、第6時限は二通りの時間割が設定されております。これは奇数時限で終了する授業に引続いて実施する授業への移動時間を考慮したもので、別表下段の網掛けして示してある時間帯により実施します。また、第6時限から開始する授業については、全て14時15分から開始します。
4. 昼休みは12時10分～13時20分の70分（一部は12時20分～13時20分の60分）となります。

別表 <時間割>

(午前)

時限	1	2	3	4
時間	9:00～9:45～10:30		10:40 ～ 12:10	
			10:40～11:25	11:35～12:20

(午後)

時限	5	6	7	8
時間	13:20 ～ 14:50		15:00～15:45～16:35	
	13:20～14:05	14:15～15:00		

昭和62年度学部入学試験 “願書”受付締切

昭和62年度学部入学試験の願書受け付けが、去る1月12日(月)から19日(月)まで行われた結果、募集人員1,065名に対し、6,624名(6.21倍)の応募者があった。

9年ぶりの入試改革に伴い、今年から国公立大学がA、Bグループに二分され、受験日が異なるため、受験生は2校受験できることとなった。

本学の願書受け付けは、全て書留郵便に限っており、直接持参は認めていない。

初日からの出願状況のすべりだしは、例年に比べて鈍い出足であったが、徐々に増加の傾向をたどり、当初から予想されていたとはいえ、昨年の志願者数を大幅に上回った。

選抜方法は、第2次学力検査に先立ち、第1段階選抜として志願者数が総募集人員の約4倍を越えた場合には、共通第1次学力試験の成績により類志望にかかわらず第1段階選抜を行い、募集人員の約4倍にあたる合格者を選抜することとなっている。その合格者は、2月20日(金)正午頃本学内(大岡山キャンパス)に掲示されるが、合格者として発表された者については、来る3月4日(水)・5日(木)の両日に第2次学力検査が実施され、その結果は、3月20日(金)に合格者として発表される。

なお、志願者数は次のとおりである。

募集人員		第1類	第2類	第3類	第4類	第5類	第6類	計
年度		225名	108名	169名	198名	219名	146名	1065名
昭和62年度	志願者数	1,321	444	990	1,584	1,499	786	6,624
	倍率	5.87	4.11	5.85	8.0	6.84	5.38	6.21
昭和61年度	志願者数	789	251	475	825	719	335	3,394
	倍率	3.91	2.35	3.08	4.17	4.20	2.60	3.53

学内LANによる附属図書館 オンライン目録の利用について

附属図書館オンライン目録の検索が、学内LANを通して可能となりましたのでお知らせいたします。従来、学内研究室等からの利用は電話回線のみに限られていましたが、このほど図書館システムとNet/Oneが接続された事により可能となったものです。

窓口回線は二つ用意しており、通信速度4800bps以

上で直接Net/Oneに接続している端末から利用できます。

利用につきましては、従来同様申請方式といたしますので、御希望の方は各端末(総合情報処理センターと接続可能な端末)単位で責任者を決め、図書館1階カウンター備付の申請書に御記入の上お申込み下さい。なお、既に電話回線によって申請済みの方が利用される場合には、利用方法変更申請書(図書館備付)の提出が必要となります。

詳しくは、下記担当掛までお問い合わせ下さい。

記

附属図書館閲覧掛 ⑥内線2097
附属図書館分館事務掛 ⑥内線2108
(附属図書館)

昭和62年職員成人式開かる

去る1月14日(水)午前10時から学長室において、本学職員の成人式が行われた。

式は、成人式を迎えた6名(男子職員5名、女子職員1名)と局長はじめ部課長の列席のもとに、学長から成人を祝う挨拶に始まり、成人者に対して、学長から一人一人記念品のアルバムが贈呈された。

その後、参列者一同記念撮影をした後閉会された。

なお、今年成人式を迎えた者は次のとおりです。

佐藤 剛 工学部建築学科 技官
大淵 学 工学部事務部材料事務室 事務官
齋藤 順一 工学部事務部建設事務室 事務官
守屋 仁 総理工等経理課経理掛 事務官
藤井 時男 総合理工学研究科事務掛 事務官
辻 矢磨子 精密工学研究所 技官

昭和62年度プログラム相談員の募集

昭和62年度のプログラム相談員を次の要領で募集します。

応募される方は、申込用紙が情報処理センター2階(大岡山)及び長津田分室の各利用者控室に用意してありますので必要事項を記入の上、来る3月14日(土)までに各地区業務掛へ提出して下さい。

1)応募資格：本学の教官系職員または大学院生で計算機に関する知識をある程度お持ちの方、あるいは、これから意欲的に勉強しようと思っておられる方。

当センターの利用等について建設的な

意見を持ち、その運用に積極的に協力
いただける方。

- 2) 募集人数：情報処理センター（大岡山） 10名
同 センター 長津田分室 6名
- 3) 任 期：昭和62年4月から昭和63年3月末まで
- 4) 内 容：隔週1回2時間、利用者からのプログラ
ム相談に応じる。
- 5) 特 典：イ)一定額分の計算機利用負担金を免
除する。（7万円を限度とし、初年
度5万円、経験年数に応じ1万円づ
つ加算）
ロ) 2万円分のマニュアル類を貸与する。
（総合情報処理センター）

研究開発新設科目「技術と文化」 附属工高生徒に学長特別講義



1月16日(金)、午後2時より、大岡山において、田中郁三学長の特別講義が行われた。これは研究開発による新設科目「技術と文化」の締め括りとして、附属工業高校3年生を対象としたものである。

講義は化学の話から始まり、「科学や技術が我々を
駆り立てるのはスポーツと似ている。それは極限を
次々と変えて行く喜びである。勉強には基礎的なも
のと応用とがある。どちらを先にするかは各人の自
由だが、系統だててやる勉強（特に実験・実習）を
疎かにしてはならない。」という内容であった。

◆ 謹 告



本学名誉教授原島 鮮氏(享年78歳)は、病氣療養中のところ去る12月26日午前10時21分逝去されました。

ここに深く哀悼の意を表し、御冥福をお祈り申し上げます。

同氏は、昭和5年東京帝国大学理学部物理学科を卒業後、浅野セメント(株)、東京帝国大学助手、第一高等学校教授、九州帝国大学助教授、同教授を歴任後、24年3月本学教授に転任、33年3月辞職され、54年に名誉教授となられ現在に至っていました。専門は、物性論(液体、固体)。

東京工大クロニクル No.198

昭和62年2月20日

東京工業大学広報委員会 発行©

東京都目黒区大岡山2-12-1 〒152

電話 03-726-1111 内線2032
